

『長野県民新聞』原稿

長野県高等教育への期待

公立大学法人 国際教養大学理事長・学長 中嶋 嶺雄

わが国には現在、七八〇校余りの四年制大学がある。具体的には国立大学が八五校、公立大学が八一校、私立大学が約六〇〇校である。国際水準から見ても、大学が多すぎる。一方、大学進学率の上昇にもかかわらず、少子化の影響もあって一九九二年をピークにわが国の十八歳前後の受験人口は急速に減りはじめている。その結果、多くの大学が定員割れしていて、まさに大学全入時代が到来している。このことは大学生の学力の著しい低下をもたらしており、わが国の将来にとっても深刻な問題である。

私が国立大学協会副会長を務めていた二〇〇〇年前後は国立大学が九九校であったが、この十年間に国立大学の一部の統合が進んで数は減少した。山梨医科大学が山梨大学と合併するなどのケースである。その成功例は大阪大学と大阪外国語大学との統合で、いまや大阪大学は日本一の規模になり、大阪外国語大学を引き継いだ大阪大学外国語学部は、私の務める国際教養大学と並んで、外国語・国際系大学の入試難易度では東京外国語大学や上智大学などを抜いてトップに立っている。

一方、公立大学はこれまで国立大学と私立大学の間に挟まれてあまり目立たなかったが、最近では大学数のみならず学生増も著しく、地方の時代に備えて存在感を増している。大都市圏への学生や若者の集中傾向に歯止めをかけ、地方を活性化するという点でも、公立大学の存在が見直されているといえよう。このような流れの中で、国公立大学に比して私立大学は相対的に苦しい立場に置かれており、私立大学間の生存競争が激化するとともに、学生が集まらずに倒産の危機にさらされている大学も数多い。現に二〇一一年四月の時点で八校の私立大学が学生募集を停止している。

こうした状況下で長野県の四年制大学を見てみると、国立大学が一枚(信州大学)、公立大学が一枚(長野県看護大学)、私立大学が六枚(佐久大学、諏訪東京理科大学、清泉女学院大学、長野大学、松本大学、松本歯科大学)の合計八大学となっている。近隣の新潟県(十四校)や群馬県(十四校)、静岡県(十三校)、岐阜県(十校)と比べると、大学数は大変少ない。これをいわゆる偏差値や入試難易度で見ると、長野県の国立大学、公立大学は全国的に見て中位の上といったところだが、私立大学六枚は残念ながら偏差値40前後という状態で、このままでは将来性にも欠けるという評価になってしまっている。

もとより偏差値が高いだけが大学の存立理由では決してない。これからは大学のそれぞれの特色を生かした役割分担が重要になり、世界的な研究拠点を目指す大学、リベラルアーツを中心に教育を重視する大学、国際的人材を養成する大学、ローカルな地域貢献を主要課題にする大学などが棲み分けする必要性がさらに高まるであろう。この点で注目されている長野県の大学が最近の松本大学であり、『日経グローバル』(日本経済新聞社産業地

域研究所)の「大学の地域貢献度ランキング」で二〇〇九年に全国第三位にランクされて脚光を浴びた。最近の『週刊東洋経済』(2011・10・22号)の特集「本当に強い大学」でも松本大学が「教育力」の項で第十八位であった。『日経グローバル』の二〇一〇年のランキングでは長野大学が第六位、松本大学が第十一位で、国公立大学に比して比較的に数が多い私立大学が上位二十校のなかに三校しか入っていないなかで、長野県の私立大学が二校ランクインしていることは、特筆すべきであろう。

以上に見たような文脈で総合的に考えれば、長野県の大学は地域と結ぶ大学としての特性を有しており、この点には強いのだが、高等教育機関としての全体的な体質においては、他県に比しても脆弱だと思われる。こうしたなかで長野県は二〇一一年七月に「長野県短期大学の将来構想にかんする報告書」をまとめ、同短期大学を四年制の公立大学に移管するという結論を出している。長野県短期大学について私は十分な知識をもちあわせていないけれど、すでに六〇年以上の歴史を有していて、卒業生は母校愛に燃えているようなので、閉校への道は避けるべきであろう。しかし最近の短期大学をめぐる険しい環境、特に大学に併設された短期大学部とは異なる単独の公立短期大学の将来はかなり厳しく、現にその数もピーク時の全国六〇数校から一〇数校にまで大きく減ってしまっている。

長野県は以前から全国に先駆けた教育県といわれてきており、信濃教育会に象徴されるような歴史と伝統を有する教育県であった。その長野県が最近の小中学校の全国学力テストの成績においても、今私がいる秋田県が四年連続で47都道府県のトップであったのに比して、全国的には毎年ほぼ中位に位置している。

高等教育においても、秋田県が信州大学にほぼ匹敵する医学部のある国立の秋田大学を有しているのに加えて、それぞれに個性的な四年制の公立大学を秋田県立大学と国際教養大学と二校もっていることに比して、長野県はかなり立ち遅れている。秋田大学は信州大学が一九一〇(明治四三)年創立の旧上田蚕糸専門学校を受け継ぐ全国唯一の繊維学部を擁していることと同様に、同じ年に創設された旧秋田鉱山専門学校が現在は工学資源学部となって特色を発揮している。秋田県立大学は本荘市に工学系中心のキャンパスを有し、秋田市北部には生物環境や情報系を中心とする秋田キャンパスがあって、いずれも日本経済の最盛期に建設された広大かつ充実した設備を誇っている。最近では八郎潟の広大な干拓地農業で知られる大潟村に、農機系のアグリビジネス学科を開設して注目されている。これに対して二〇〇四年に新設された国際教養大学は森のなかの小さな大学ではあるが、全国・全世界から優秀な学生が集まっており、国際教養教育を中心にしたグローバル人材の育成に邁進している。その結果、最近の『週刊ダイヤモンド』(2011・12・10)の「就職に強い大学ランキング」によれば、一橋大学、京都大学に次いで、第三位にランクされるまでになっている。

上記の報告書は、新しい四年制の公立大学では地域貢献を一つの柱にすることをうたっており、もう一つの柱がグローバル化に備えた国際的人材の養成だとしている。そのような大学の誕生には私も信州人として大いに期待したいところではあるが、国際的人材の養

長野県の学

成も目指すとするならば、先ず第一にそのための国際レベルのカリキュラムを策定し、それにふさわしい教職員を配置しなければならない。長野県の高等教育にとっては大いに夢のあるプランには違いないが、そのために克服すべき課題もまたかなり大きく重いといえよう。